〈解答〉

1　1　イ

2　電話のベル

3　A　イ

B　［例］山へ入ることを決心している（13字）

配点　1　1、3Aは各2点、他は各3点　10点満点

〈解説〉

1

1　「大声」は前が修飾語で後が被修飾語となるものなので、イ「深海」が同じ組み立てとなる。ア「年少」は前が主語で後が述語となるもの、ウ「虚実」は対義字を重ねたもの、エ「作文」は前が動詞で後がその目的語となるもの、オ「競争」は類義字を重ねたものである。

2　擬人法とは、人間でないものを人間に例えて表す表現技法のことである。電話のベルが鳴った場面では、「電話のベルが彼の自転車を止めた。」という一文に擬人法が用いられている。擬人法を用いることによって、加島が電話の音を気にして自転車を止めたことがより強調されている。

3　電話のベルの音に反応し、自転車を止めた加島は、電話の内容を聞けば山へ入らざるを得なくなると感じている。電話の受話器を取るわけでもなく、その場から動けずにいるこの時の加島の様子からは、電話の内容を、イ「聞こうか迷っている」加島の心情を読み取ることができる。その後、トラックの運転手の「なあんだ、つまらない」という言葉に、自身も遭難事故を対岸の火事として片付けようとしていたことに気づかされた加島は、山へ入ることを決心し、永松の手から受話器を取って、「すみませんが、初めからもう一度話して下さいませんか、順序を立てて、ゆっくりしゃべって下さい。」と言ったのである。